

## 長野県西駒郷における知的障害者の地域生活移行の取り組みと グループホームにおける支援：講演録

山田 優

### 講演テーマ

「知的障害者の地域生活移行の取り組みとグループホームにおける支援」

日 時：平成 18 年 9 月 16 日（土）

13：30～15：00

会 場：島根県民会館 3 階大会議室

講師：長野県西駒郷地域生活支援センター所長

山田 優 氏

司会 島根大学 加川

山田さんは現在、長野県の西駒郷地域生活支援センターの所長をされています。西駒郷というのは定員 500 名で、赴任された平成 15 年当時は 400 名以上の方が利用されていた施設ですが、平成 15 年からグループホームを長野県下に設置して地域移行を進めているという非常に有名な取り組みをされています。宮城県も地域移行の流れが進んできたのですが、長野県も同様に地域移行を先駆的に進めてきた県だと思います。

長野県の前は愛知県の知多で地域生活支援をされてきました。愛知県では施設長をされていましたが、施設長からコーディネータに転身され、施設長よりコーディネータのほうが、やりがいのある仕事だと思っておられるように感じました。

今日はそのお話も、西駒郷のお話と同時に伺えるかなと思います。

山田

こんにちは、山田優と言います、よろしく願いいたします。長野県の西駒郷は平成 17 年に事業団に指定管理者制度で認可され、長野県職員として 4 人のスタッフと一緒に地域生活移行を担当させていただいて 3 年数ヶ月経ちました。

島根県と言えば、次男次女が江津の愛真高校という全寮制の学校でお世話になりました。そういう意味でとてもご縁のある所です。

お話を、とお声がけをいただきまして、西駒郷から地域生活に移行している現状についてお話したいと思います。コーディネータというか地域支援というか地域相談支援は、長野県で私は西駒郷の担当ですが、とても気になって相談支援事業体制で圏域が 10 圏域あります。その内容が、障害者総合支援センターというのをつくって知的・精神・身体それぞれのコーディネータそれからグループのコーディネータ、就労支援ワーカー、生活支援ワーカーと、田中さんが知事であった時にいろいろお願いして、それぞれの圏域に最低 5 つのスペシャリストを置いてもらうということ、長野県北

信圏域障害者生活支援センター所長の福岡寿さんと一緒に県庁で論戦をはってつけていただきました。

とりわけ重要な地域生活支援事業、市町村事業にだいが今歩み寄って計画を立てていただくことになりましたが、とても気になっている移動支援はどうなっているのか、いうところが長野県としてまだはっきりしてきておりません。

地域で暮らしていくためのツールが、たくさん必要になってきます。地域生活支援にしても、数字は「いやあよくやったね」と多くの方からお褒めをいただきますけれど、いよいよ地域移行された方たちのいろんな思いが、1枚2枚ペールをはがされ、ご自分の暮らしを主張され始めるわけです。その主張を抑えてしまったら何にもならないわけです。抑えるというよりは、その主張が従来 of 施設支援のテクニックでは間に合わないのです。

元々地域生活支援というのは臨機応変でとか、いつでも駆けつけるとか、サービスはなかったら作ればいいのか、あったらとことん使いまくれとか、あるいは使いやすいように変えようとか、これはコーディネータ時代からしてきて、そのように制度は変えていけると思うのですが、もっと大きな部分で地域移行をした人たちのニーズというのは沸々と湧いてきて、今日多くいらっしゃっておられる世話人さんたちが、きっと直面されていると思うわけです。

そんなことを通して気づいたことをお話ししながら、みなさんと一緒に勉強させていただければいいかなと思っています。

とりわけ西駒郷という所をポイントにしながらお話をさせて下さい。

#### 西駒郷地域生活移行の原則

長野県で考えたのは、家族の理解が得られないと、いくら正義を振りかざしても後でもつれてくるわけですので、家族は入所施設にどういう気持ちで入れたのだろうか、どういう気持ちで西駒郷を選択されたのだろうか、ということをもまず考えようと思いました。

家族に、その地域生活移行について、お子さん・兄弟が施設から出られた時に、家族の方にも応援をお願いしますという、いろんな精神的な面ではもちろんつながっていきますが、直接的な支援というのはそれは隠さないです。

もちろんお家に帰る方もいらっしゃいますが、家族に転嫁することなく、また各個自宅に戻るといふ地域生活移行ではなくて、グループホームなどの生活の場を用意します。

これはいいのか悪いのか、よくわかりませんが、いつでも再入所できますという安心の担保はしておきます。

西駒郷の地域生活移行は、全県的に西駒郷対策だけではなくて長野県に住んでおられる、あるいは施設を利用しておられる方たち全てに使える仕組みとしていこうというのが考え方としてありました。

そのためには、暮らす場と働く場と土日どうするのというのもあるのですが、権利擁護支援体制、相談支援体制ですね、これもしっかり作っていきましょうというのが大原則です。

西駒郷のホームページですが、長野県のホームページの障害者福祉とか西駒郷という3文字で検索していただくとこれにすぐつながります。

西駒郷のホームページに西駒郷地域生活支援センターという別のホームページがあり、そこに私がたまに気のついた時にちょっと書いたりとか、実際にリアルタイムに地域生活移行されている方たちの数字とか、そんな情報をリアルに出しておりますので、西駒郷と入力していただければ、そういう情報が手に入ります。

#### 西駒郷の基本構想（H15～）

平成15年から平成19年の間に、約250名の方に出ていただくと。出ていただくというのは出たい人の希望に沿って応援しますという計画を立てたわけです。当時は440名ぐらいで、出たい人が250名という数字ですから残る人は、百数十名になるというのを想定して計画をつくって今、3年何ヶ月という具合です。

これを作るまでちょっとたいへんで、西駒郷改築検討委員会という委員会を作ってそこからコメントをいただいて、その内容がだんだんかたちになって示されるにつれ、保護者会の方たちは建物を新しく作る、改築する委員会なのに施設から出て行く委員会の結果はけしからんということで、未だに今もそうですが毎年1回必ず説明からしなければいけません。

そこで役員の方たちから厳しく追求され、平成15年当時は保護者の方たちは、けしからん的一方だったんですが、最近は地域生活移行はいいけど、というふうにおっしゃることがあります。3年かかったです、うれしいですね。

地域生活移行はいいけど、うちの子供は置いといてくれというふうで大体お話は収束していくんです。

でも、親御さんたちりっぱで20人とか30人とかでツアーを組まれて仲間たちが移っていかれたグループホームを見に行かれています。

集団だと、そういう雰囲気ですけど個人個人になると違くと、うちの子は引き受けてくれる所があるかなとか、大丈夫ですかという相談がこっそりとあります。それで移っていく、何でも時間がかかるんです。

地域生活移行というと、どうやってやられるんでしょう。今度自立支援法で地域生活移行というのは、理念として明記され、入所施設ではなくて地域で支えるというような仕組み形態に変わってきました。

じゃあそれが本当にできるのか、思いながらしてほしいなと思いますし、逆に言うと区分4以上は生活介護、施設入所にそのままいていいのか。とんでもないと思います。

## 地域生活移行前の準備と対策

地域生活移行というのはどうやって作るのかといたら、当然ながら地域生活移行というのは、誰が語るんだろうかと思うと、支援者が語ったらきりが無いと思います。

施設に入れといて海外からノーマライゼーションという情報が入ってくる、研究者の方たちが、わが国はこうあるべきではないかと情報を出します。

海外はこうだから施設は悪だ、出てもらわなきゃいけないんだというふうに果たして言っているのか。

不謹慎な言葉ですが施設に送り込んだ「おとしまえ」をつけてほしい。だから勝手に出す・出て欲しいといわないでください、みたいな。出るのは本人が決めればいい、私たちは出ることを支える、応援する側でなければ。それが職員の役割です。

安心して暮らしていける仕組みを作るのが、税金をうまく配分する行政の役割でしょうし、家族はそういった流れを見ながら我が子のことを心配して下さる。そして支援の質が悪ければ、我が子のために文句を言っていただくという役割です。

地域生活移行は本人が決める。だから本人が決められる雰囲気にありますか、ということなんです。本人が決めなきゃいけないのに決められないような状況とか、自分の思いを話すことが出来ないような雰囲気の中で、ご本人が自分の思いを言えなかったら、これは最初から駄目です。

区分3、区分1、2だから出なきゃいけない、こんな失礼なことはないです。だからちゃんと聴くんです。彼らは地域って何かわからないです。施設を出たいという言葉に込められている。その言葉だけでリアリティ、現実的な生活スタイルを私たちが目に見えるようなかたちで彼らに伝えていくのが支援計画で、ものすごく簡単です。簡単なことが出来ないのが難しいですね。

西駒郷の職員が、決して地域生活移行に反対だったんじゃないです。一生懸命模索されていたというのは、過去のいろんなまとめられたものを見ると出てきました。

私が平成15年に赴任した時に、施設職員さんにまずソノ気になっていただくために3つの項目で3日間、合計9日間の講義をしました。福岡さんにも1つ2つ手伝ってもらって、ノーマライゼーションって何だ、地域生活って何だろう、ケアマネジメントというのを勉強してもらいました。

給食を作っておられる方とか看護師さんなんかも全員対象で参加してもらいました。9日間のうちどこかで参加でき、200名近い職員のうち9割の方が参加し学習して下さいました。

職員の方たちも「山田さん、僕らは地域生活を一生懸命やろうと思っていたんだ、県がだめって言っていたんだ」と言う。歴代の部長さんが所長で来られ「自分がいる間は変わったことをするな」とおっしゃっていたそうです。

事業団の職員はソノ気になって一生懸命検討会をやっていたのを、ことごとく潰されたというがあるので「やっと実現するんですね」と言われ、うるっときながら職員さんから声をかけていただいたので「ああここは出来る。すごいなあ」と思いまし

た。「是非一緒にやりましょう。うまくいったらみんなのおかげ、悪かったら私のせい  
でいいですから」と言って、段々やるうちにみんなの顔がいい顔になってきました。

家族は理解するか。多くの家族は不安で理解なさろうとはしません。安心感が目の  
前に見えてこないと家族というのは、ぎりぎりまで我が子のことを心配する。それは  
いいんですよ、家族の役割ですから。どうぞご心配になって下さい。

県はちゃんと施策に込めるか。施策に込めるということは、ちゃんと具体的な財源  
を持って、目の前に見えるものということです。掛け声だけではだめです。よくあ  
るのが、きれいな何とか計画というのを、お作りになる所があります。

そこで5年間に300人入所定員を減らします。地域移行をして入所定員を減らしま  
す。そうすると利用者さんが出身地の入所施設から入所施設を渡り歩くわけです。

メインの施設は確かに減ってきているけど、実質的には減らないという。そこは自  
助努力だと。そうじゃなくて、ちゃんと具体的施策がないからです。

業界は船に乗ってくれるか。つまり西駒郷だけやっていたはだめです。民間施設も  
本当にその気になって地域生活移行という事に真剣に向き合っていただけだろうか。  
長野の場合は、民間の入所施設にずいぶんお願いをしてこの計画は進んでいます。

地域・県民のコンセンサスが得られるか。これは地域の反対というのが絶対あるわ  
けです。

というような事が地域生活の移行、これは長野だけでなくどこでも使える1つの  
キーワードだったかなと思いました。

地域性生活の主体は本人・・・よく聴くという意味

聴くというのはアンケートじゃないです。アンケートは駄目です。人生を聴くのに  
アンケートがあってもいいの。×でもいいの。冗談じゃない。こんな馬鹿な失礼な  
ことをやっちゃいけない。ちゃんと職員は向き合って事情を説明しないとダメ。  
ただ職員によっては、全然違いますよ。

「ようやく入所施設から地域で暮らせるように、長野県も考えることになりました。  
ついては、あなたはどのような所で暮らしたいですか?」というような前段階があって、  
説明してそれで聴くんです。

聴いた内容を職員がまとめてはいけないんです。どうやらうちに帰りたいと言っ  
ているようだ、でいいんです。家族の思いのたけを存分に語ってもらえばいいんです。  
こういったことを地道に、お1人1時間ぐらい時間をかけてやればいいんです。

1時間やると四百何十人いれば、すごい時間がかかる。1人の職員が3人4人ケ  
ースを担当して機械的に3交代で、全体の計画がまとめ上がってくるのは1ヵ月以上、  
へたしたら全部終わって上がってくるのに2ヵ月ぐらいかかります。いいんです、あ  
せる必要はありません。

人生を聴くのに時間を急いだらいけない。こういったことを書いて下さいというア  
ンケートは駄目。とにかく聴くこと、聴く関係を作ること。想いを言葉で表現すること。

言葉で表現出来ない人もいます。言葉の表現が難しい人は、体験の場を用意して下さい。長野県はよくやってくれました。平成16年度に1,000万円かけて古い寮を改修して、そこに障害の重い人の自活体験を出来る場を作ってくれ、毎年3,000万円の人件費をかけてくれました。職員4人配置して、世話人さんも2人配置しました。122名が重度ということで意思表示困難というデータが出ました。

460から122名を除いた残り340名くらいの内の250人が出たいと言っているんです。一応120プラス90人の210くらい体験を聴いたらよいのではと言われたが、僕はそうじゃない120何人の意思表示は体験で聴いたほうがいいじゃないかと、それでお金をつけてくれて9割の人が2週間の生活体験をします。

月曜日から金曜日までで、強度行動障害だから対象からはずす、全介助だからはずすのでもなく、全ての人を対象としました。家族から体験の了解が得られなかった20名近い人を除き全ての人に体験してもらいました。

それが今年10月で2巡をしたと思います。この結果は今まとめていますが、分かったこと・実証できたことはいかにして大団体の施設の中で、彼らの問題行動が発生しているかということです。

わずか2週間で、何がわかるのかと言われるかもしれないけれども、2週間の中で彼らがここで生活していいのかという怪訝そうな顔をしながら1週間目はちょっと変な気分、2週間目はものすごくほっとした感じで彼らは生活体験をしていました。

そういう状況を家族に見てもらいたかったけれど、およそ100名のうち来てくれた家族は1割もいませんでした。家族は、様子を見に来ると地域生活移行を認めたことになってしまうと思われたのか、認めたくないんですね。でも体験だけは良いというわけです。

職員は体験で実感するわけです。どんなに重い障害のある人でも、刺激の少ない本人の部屋、ゆったりとした暮らしが重要なんだと、みんな知ったんです。障害の重い人は体験の場を用意しておけば結果は出ると。

職員が「山田さん、250人の地域生活移行ですよ」と言ったら「いや違う全員対象です」「そんなこと出来ませんよ」「出来ませんじゃない。体験で証明されたじゃない。施設職員として何をするかわかったじゃない。」

彼らが入所施設で過ごした20年・30年の証や痕跡は何？ケース記録？Aさんは2冊、Bさんは5冊。この2冊と5冊のファイルの違いは何？一生懸命自己主張した人は5冊、あきらめた人は2冊なのかもしれない。たったこれだけです。人生で残っている軌跡は、一番最初のページには、若かったころのセピア色した写真があります。白髪が増えた今の姿とのギャップは誰が埋めるのと。

だったら一生懸命聴いてほしいし、重度の人達が小さな集団生活を体験をするということに、なんであなたは共有出来ないの？と言ったら「ああそういう意味がありますね。言葉ではいえなくても暮らしで見せてくれていますね」と、みなさん協力してくれました。この大前提がない限り、地域生活移行なんかはあり得ません。

入所施設にほとんどの人が、来たいと思って来た人はいない。家族も身を切る思いで託した。だったら出る時には「おとしまえ」をつけて、すみませんでしたと言って、あなたの過ぎ去ってしまった人生をたった1時間で聴くのは失礼だ。じゃあすぐ受け入れ先がない時は毎年必ずお聴きしますと、いったことで本人の思いを何年かかけて聴いていくと、最初は疑い深いから自分の本音を言いませんよ。時間が要ると思うんです。

そうすると段々言ってこられます。だって言ったことの経験がないんです。言ってくれていいよと聴かれていないんです。いつも否定されます。否定された人生を歩んできたのに、自分の思いを肯定して一晩で言えますか。ということをやちゃんと踏まえていかないと聴けないよということです。

#### 地域生活への移行を決めるのは私

これはグラフが小さくなってきたのは、何百人いた元の数（入所者数）が減ってきただけの話です。平成15年7月の段階ですから、460何人から20何人減っていますけれども、この時に、グループホームに行きたい人が188人。今でもやっていますので、平成16年11月には合計370人に減っていた。この時もグループホーム希望が133名、去年（平成17年）は100人がとりあえず行きたい。

これは自分で言える方で、120名くらいの方は意思表示困難の人です。だけど西駒郷の施設にこのままいたいという方も30何人はおられます。この人達まで区分1、2で、あるいは非該当の人が結構多く、この辺の方は今は何とか努力しておられます。

家族も大変です。西駒郷にこのまま置かせてくれが半分くらい。偉いです家族の方も。地域生活移行に賛成だ。どうぞ我が子にいい所を探して下さいという方たちは、数は減っていても、それなりの方はしっかりとまだいて下さいます。

こういう数字をよりどころにしながら、地域生活移行を進めて行きます。

#### 平成14年度～18年度8月迄の地域生活移行状況

昨年3月にようやく重度、最重度と言われている所から3名の方がグループホームに移られました。比較的若い自閉タイプの方たちは、167名の地域移行です。入所授産施設に243名おられたのが今は116名、半分以上減っています。

179名の方がグループホーム、アパート、家庭12名含めて、地域生活移行に行っているわけです。

お亡くなりになったり3、4名は入院しております。入所施設に移って行かれた方が20数名、全体で減っています。新たな入所は引き受けていないです。

県職員は今引き上げている最中で、今50数名残っています。最盛期には100何名いたと思いますが、どんどん引き上げております。後は事業団だけでということでシミュレーションしながら、この減り加減というのは、新たな入所を引き受けていないというのは西駒郷が西駒郷でなければいけない理由はどこにもないからです。

だから西駒郷は西駒郷であり続ける理由はないねと言いながら、機能、役割は終わったと、全県的な施設の役割は終わったので一つの圏域の資源としてがんばりましょうというシナリオです。

#### 西駒郷入居者出身圏域状況（入居者の出身地）

県全体から西駒郷にきていますが、地域移行を毎年やっていくと、どんどん数が減っていきます。まだ松本は82名そのうちの半分の方が西駒郷に残っておられます。

北信圏域はもう3名しかいないとか、この圏域では8名のうち地域移行1人しか希望者がいないとか、どんどん減ってきていますので、特定の圏域だけ集中してがんばればいいなと思っています。

#### 西駒郷の地域生活への移行が市町村に波及した

グループホームはどこかにだけあるよという世界ではなくて、いろんな市町村にちりばめられるように広がったということが言いたいわけです。

現在160ヶ所、もう少し増えたかもしれません。特定の市町村に偏らない、利用者の希望に沿った地域生活移行なので、協力してくれた民間施設がいろいろな所にあります。西駒郷の人を2人引き受けたいという情報があり、毎年グループホーム運営補助金で20か30か40ぐらいのグループホームの設置計画が出ると、圏域の地方事務所がそれをまず把握して、グループホームの立ち上げ情報をくれるわけです。

その立ち上げの所に私たちが下見に行って、その時にその情報を利用者さんにお渡しすると、利用者さんは一応名乗り出て、その時に家族の了解を取り付けて、もし競争となれば、長く入所している人、より高齢になった人を優先させてもらいます。

後は見学に行って、その時に出身市町村の担当者、グループホーム設置の担当者、地方事務所の私たち、本庁からの面々がそこに参集します。

みんなが協力するという体制をつくってやっている、それが良かったのかなと思っているわけです。

#### グループホームの年度別設置状況

160ヶ所の西駒郷のグループホーム、今まで1桁でしか作られなかったのがどんどんと来たという感じです。自立支援法になっても、今のところ予定通りつくられています。

西駒郷の地域生活支援センターのホームページを開いていただくと、「グループホーム事業計画」という表が出てきます。どこそこの法人がグループホームをつくってくれて、何人引き受けてくれるかという情報、これに沿ってどこそこ出身の人が内定したと、内定はいつでも取り消せます。

グループホームは、見に行って嫌だったら止めていいんです。そんな情報がオープンにされていますので、それで調整していくということになっています。



## 西駒郷の地域生活への移行効果

地域生活移行は、民間入所施設からも同じくらい地域生活の移行が始まって、また、在宅の方がグループホームを選択している、すごいですね。

この3年間で民間入所施設と在宅からの地域移行が362名。ひょっとしたらこ方たちは入所施設予備軍だったかもしれない、この方たちは民間施設ですから、経営を維持していくために、新たな入所希望の人を引き受けて、入所対象者を一気に減らしたという効果があったということで、県も感心しています。

最近の入所施設の空きが出て、埋まらない圏域が出てきました。だから施設を作る必要がなくなってきたという効果がありました。

## 西駒郷地域生活移行の特徴と共通課題

熱心な施設があると、その施設から今度自立支援法でいうと30分範囲ですか、世話人は10分、都会は歩いて10分とか、自転車で10分とか長野だったら自動車でないのだめだとか、結構半径が違うんですが、大体その周辺にグループホームができて、熱心なところほどその周辺で地域といえども利用者さんはお住みになる。

これはいびつです。どこで暮らしたいか、例えば浜田にある入所施設に米子の方が入っておられる。米子のグループホームに帰りたい。でも浜田の周辺施設は浜田の周辺に応援するグループホームをお作りになるから、その辺に移行する。これは変じゃないですか。

帰りたい米子にグループホームの空き情報、設置情報があるとすると、そっちへ行けないのか、誰がそういう調整するのか。そうでないと地域へ移行したといっても入所施設から地域へばら撒いたというような雰囲気が終わってしまいます。

利用者さんの意向に沿った入居調整は、誰がやるのかというところが気になるわけで、これをないがしろにしていたら、確かに入所施設から人は減ったかもしれないけれども、利用者さんにとってはハッピーではないと思いたいわけです。そうした課題は内在のままということです。

特に気になっているのは、地域生活支援事業は市町村事業ですから居住地特例はありません。居住地ですから、住んでいる市町村に申請してサービスを受けるわけです。今まで居宅介護である移動介護は出身地に申請して支給を受けていました。支給決定が今度は居住地になるため、お金を出す所が違います。その辺が今まだみなさんクリアになっていないので、どうするのだろうと思います。

私は基本的には居住地でいいと思います。住んでいる所に転入届を出しその地域の選挙に行き、消費者になる。例えば浜田の出身の方が米子のグループホームで暮らした時に、米子の市議会議員選挙の投票をし、市長選挙の投票をするわけです。れっきとした市民ですから米子市の市税を使いながら米子市の地域支援のいろいろなサービスを受ければいいんです。

9月の終わりまでは、支援費制度によって浜田市からお金をもらっていたわけです。

変ですね。生活実態が米子市にありながら市民であって市民ではない。今度はやっとまともになる。まともになる体制を各市町村はとっていらっしゃるでしょうかと、私も心配なんです。でもね、実際は市町村間で調整機能が働いて、出身地になってしまうのではないのでしょうか。

変ですよ。障害者は厄介な存在なのではないでしょうか。税金を必要とする困った存在なのではないでしょうか。障害のある人が自分たちの町にたくさん住んでおられては困るのでしょうか。私たちは必ず誰かの応援を受けて死んでいくわけですね。

障害者というのは、別に今見えている障害者だけではなくて私たちもすべて同じじゃないですか。地域生活ということは共に暮らしていくわけですから、障害がある人が何処に住もうが自由なんです。住んだっていい。ところが住めないという雰囲気があるというのは嫌ですね。法律違反をしないためにと考え出された居住地特例という言葉・抜け道について、もっと関心を持っていただきたいなと思います。

#### 長野県グループホーム等整備事業

長野県グループホーム等整備事業で、6名定員の場合に2,000万円の新築に対して1,000万円まで上限で県は補助金を出します。改修の場合は6名定員で1,000万円が上限です。古家を1,000万円かけてユニットバスで襖をちゃんとした壁にしてというふうに変えていくと結構お金がかかるんですが、その2分の1は県が補助します。

西駒郷を引き受けてくれると、6分の1をかさ上げして3分の2まで補助します。だから西駒郷の人たちを引き受けてくれているんです。

これが県の具体的なインセンティブ、動機付けです。地域生活移行の動機付けというのを自分でいいとこ取りし、かさ上げするという、姑息かどうかというより施策として有効に働いているということです。

松本あたりはさらに出してくれるので、設置者は6分の1の資金を用意すれば良い事になります。1,000万円の改修だったら160万円ぐらい用意すると、1,000万円の改修は補助金が840万円出てきます。

#### 重症心身障害者等グループホーム運営事業

これは運営費、今まででいうと区分1あるいは障害が重い方だと区分1で、年間630万円ぐらいのお金がきていました。重症心身障害の方だったら、同じくらいかさ上げして年間1,200万円で運営して下さいということです。

強度行動障害とか全介助レベルの知的な障害がある人の場合は約1,000万円で運営して下さい。これは県と市町村が2分の1補助します。つまり障害の重さを言い訳にしない。障害が重いから地域で暮らせないというような、こんなばかなことがありますか。

障害の重さは本人が重いとか、より支援が必要だということ、本人がそうしたくて生まれてきたわけでも何でもないので、本人の障害のせいにはしないで下さいという

ことで、こういうのもお願いして施策でつくっていただきました。

#### 相談支援体制の課題

4種類5種類のコーディネータを配置する。これが今困っています。平成18年度末、平成19年の3月までは県は予算を組んでいる。平成19年4月からはわかりません。知事が変わりましたので、どうなるかわからないです。困ったなと思っています。

圏域の市町村をお願いをして、どうぞ相談支援に関する財源を、この方たちがこんなにがんばっているのだから、担保してもらえませんかということで、今まわっていて10圏域の内の8つは何となくうまくいきそうで、2つはちょっと危ないからと、もういっぺんやろうかといういながら回っています。

そうしないと県が予算を組んでいるのは生活支援ワーカーだと500万円が精一杯、だから各法人から年間収入六百数十万の優秀な職員を生活支援ワーカーで派遣したとしても、百何十万円足りない分は法人持ち出しで、すみませんといういながら実際にやっていたというのが実情です。

こういった人の相談体制がしっかりとないと、地域生活移行というのはなかなか安定していかないと思います。

千葉県は昨年、グループホーム支援ワーカーというのを独自県単で付けました。13圏域ありますので、今年全部に配置するそうです。

その方たちは、圏域内にあるグループホームにどこへ行っても良いという通行手形を持って、よその法人であろうがNPOだとか関係なく利用者さんの所に行って大丈夫ですか、困ったことはありませんか。世話人さんの所に行って何かお悩みはありませんか。バックアップ施設に行って、支援に困っていることはありませんか、と御用聞きに行って、圏域内のグループホームに関する相談支援体制について必要なセッションをするという人を配置しました。いいですね。長野もそれがほしいなと思っているけど、わかりません。そういった人たちがいてくれるとすごく助かります。

相談支援体制というのは、この人たちがきちっと担保されないと、とても怖い。だから市町村の方々にもお願いしたいんですが、相談支援というのは目に見えて実績がわからないわけです。実績って何？評価基準って何？相談件数だけか、電話が年間2千件とかケア会議が何回とか、それだけかなと思うんですけども、コーディネータに是非がんばれと言いたいです。

市町村の担当の方は、マルチタレントでとてもお気の毒です。自立支援法で何度も制度が変わる。どうするのというところで本当に悩んでいらっしゃる。在宅の障害がある人たちの生活に、とことんお付き合いをしながら、がんばっているコーディネータ。その姿は全然見えません。土日も電話が携帯にかかってくる。本当にご苦労だと思ふ。

地域生活支援事業で相談事業となる部分が、自分の市町村で例えば100万円、150万円だとパートの人しか配分できないです。それは隣の市町村と合わせて1,000万円

になって一般の人を1人2人雇用して自分たちの市町村も頼んでもらったほうが私はいいと思います。

そういったことが、きちんと担保されるかどうかは市町村の姿勢にかかっているというのは、この自立支援法の地域生活支援事業の悩みです。

安心できる環境があってはじめて、親御さんは地域で暮らさせてもいいかなと思われるようになる、これはとても大切なキーです。

こんな機能をとということで、長野県の場合は、グループホームに暮らしている人たちの相談体制もやっているということです。

圏域のサービス調整会議も今度、市町村に地域自立支援協議会というのが出来ますが、その中でネットがちゃんと張り巡らされて地域から落ちこぼれないように是非、隣の市町村とネットワークをつくっていただきたい。こういう相談支援体制があるととても私は安心できます。

#### コミュニティに溶け込んだ暮らし

グループホームがあって、世話人さんが支えて仲間も仲間同士支える、その次の支援の輪は設置した法人が責任を持っている。つまり城下町的な支援、でもちょっと地域にコミュニティに溶け込もうかなと。

この3重構造がグループホームを取り巻く、今度はケアホームを含めて取り巻く構造かなと思うんですが、できたらコミュニティの資源をうまく使って下さい。

世話人さんの役割は何かというと、お食事を作る、健康を気遣う、昼間の活動の様子を聞く等などがあります。よくあるのが、金銭管理。40歳、50歳、60歳の人に、あなた1円違うじゃない、10円違うじゃないどうしたの？毎日そんなことをするんですか。

出来たら世話人さんが、そういうことに神経注ぐのではなくて隣近所の方をゲストとして我がホームに来てくれないかなという、地域社会との橋渡し役を是非やってもらいたい。

地域のコミュニティに世話人さんが、「うちのグループホームにちょっといらっしゃらない？」とか言ってお茶飲みを誘う。

コミュニティに人材もいっぱいいらっしゃるので、それが世話人のお仕事のもっとも重要な柱だなと自分は思って今までやってきたんです。

その時の言葉の中にノーマライゼーションの理念あるいは、グループホームの事業者が出てくればいいのかと思います。

そしてそのさらに外枠に、総合支援センターの人がいてという。つまり直結して施設の余韻を引きずっているような地域生活じゃなくて、財産管理は事業者がするのはなくて第三者に任せればいい。各市町村もこれらの資源をネットとして使えばいいという構造です。

コミュニティの中でもっと資源を活用していくという、こういうグループホームの

構造のほうがなんか楽しいような、息詰まりもなくなると思っているんです。

各市町村を含めた行政サイドの方が、グループホームの設置計画から現地見学の立会い、入居立会いと全部関わって下さっている。そこに圏域のコーディネータたちも実は入っていますよということを言っていて、先ほどのグループホームを取り巻くネットの根拠はこういうところですよ。

#### 地域生活への移行で生じる課題

グループホームというのは段々現実になっていくと、彼らは葛藤するんです。地域で暮らせる、新たな暮らしが始まるわけです。世話人さんという人にご飯をつくってもらって、そこで自分の願っていた暮らしが出来る。

でも本当にうまく暮らせるだろうか。毎日通う職場も変わる、そこでうまくやっていけるだろうか。でもあれほど出たいと思っていた西駒郷(入所施設)から出ることが実現する。実現するのと不安がごっちゃになって、一過性の心因反応を起こされる。まれに幻覚妄想状態まで進行してしまう人もいます。この人たちに本当に申し訳ないと思います。

そうした状況を見て入所施設に置いて置けばよかったんだとか、寝た子を起すからこうなるんだとかおっしゃる人がいますが、違います。

こういう思いをしながら人間回復、人間復権を一生懸命彼らなりにしようとしているところへ、私たちはさらに支援者として入り込んでいかななくてはならないのです。カウンセリングもスクールカウンセラーに頼んで 10 人ぐらいの希望者にさせていただきました。それなりに役割はあったと思います。

#### 地域生活への移行過程で生じたアクシデント

地域生活移行しているんなことが起きますが、これは移行というドラマティックな場面だからあるんです。知的の障害がある人たちといえども、入所施設の中で己の心はじっと大事にされているはずですよ、自分を犯されまいと。

地域生活移行ということで、本当に施設から出られるのか。あれほど心に秘め願ってきたことが実現によって一気に解放される。解放された時に、不安があって自分で悩んでしまう人たちがいるんです。それで、一過性の混乱が起きますが、これは超えていってもらえます、寛解しますから。向き合うことへの支援をさせていただくのです。

#### 未知の暮らしへの不安を解消する手段

入所施設の方には失礼ですが施設生活でこびりついた垢を落とすには、自活訓練は有効だと自分は思っていました。今度は自立支援法で生活訓練という2年間コースが出来ましたが、その訓練課題については私も情報提供したんですが、全部が全部自活訓練をやればいいのかというわけではないということです。

我々は安易に、あなたはグループホームに行くのであれば、自活訓練を何ヶ月、と

簡単に言っちゃいけないです。

このグループホームではこういう暮らしが始まるよ、と言ったらそのための準備をしたい。カーテンを替えましょう。自分の部屋のカーテンなんか彼らは買ったことがない。自分の茶碗お箸なんか買ったことないですよ。下着なんかひょっとしたら一緒に洗濯されて他人に穿かれているかもしれない。入所施設の生活時間の多くは競争社会になっているんです。

だからグループホームに行く時にベッド、布団、カーペットを買いに行きましょう。茶碗、スリッパ、テレビを買いに行くんです。そういう時間をゆっくりと作っていく上での自活訓練という段階があると現実的でわかりやすいですよ。

自活訓練で何があるんですかね。まさか敷地の中、外の自活訓練等で買い物がうまく出来るか、お金のチェックをするんですか、やめて下さい。自分の持ち物をじっくり一緒に買ってグループホームに地域移行する、それで十分です。

移行して始まる本当の支援

グループホームでは入所施設の生活の余韻を引きずりながら規則正しさをしっかり守られて、生活をされていくことが多いのです。徐々に、早い人は2ヶ月3ヶ月くらいから自我・自分を出していけます。言葉も荒くなったり、気に入らないことがあった時に世話人さんに物をぶついたりされることも見られます。

「利用者さんにひどいことを言われた。何これ、聞いていた世話人業務と違うじゃない」と言って世話人さんが悩む。バックアップの職員が駆けつけてきたその前では、施設入所者の顔になっていますから彼らはとても穏やかな表情を装われます。帰られると世話人さんに、また悪口雑言、・・・これ甘えているのかな。

これは悪いことじゃない。人間回復のステップなんです。それを踏まえた上で支援をしていかないと世話人さんも疲れるし、バックアップ職員もそういったことを踏まえて、本人が力をつけるエンパワメントするとてもいい機会だと思ってもらわないと。

人としての成長・自分で力をつけていこうとするエンパワメントの素晴らしい機会に遭遇するわけです。どこかの大学で授業を受けているよりよほど人間学として勉強になります。

グループホームへ移った、地域へ移った、新しい環境で暮らした。そこで何事もなく暮らしている人はむしろ気持ち悪い。何事もないんじゃないかとあるんですよ。

一見障害がないと思っている、私たちの暮らしもそうです。

その中でお互い折り合って、そうか自分で責任を持つということは、こういうことかということを確認していくのです。

こんな人がいました。グループホームを訪ねていった冬の寒い時、部屋に入ったらひんやりしている。利用者さんが鼻水たらしてアフターケアに来た我々を迎えてくれ、コタツの中に私たちが足を入れたら冷えている。

何でコタツに電気をいれないの？本人はこう言った「どうしてよいかわからない。こういうものだと思っていた」。あるんですよ、そういうこと。彼らは施設で、そんな

事は必要なかったのだから。悲しいけれど、そういうことがあります。

それで、段々自分の力をつけていくわけでしょう。ラーメンも作られるようになる、施設で作っちゃだめ、太るからと言われていた。

グループホームに移行して必ず特徴となって現れるのは、太ることです。夜な夜な食べられる自由。でもそれを続けるのではなく気づいてもらう支援の方法がありますね。

お湯をかければラーメンが食べられる。段々自分で料理ができる。お湯をかけるだけでいい、料理できる。食べられる、幸せですよ。

ここのところで、自分で責任を持つことのための支援が新たに発生する。だからグループホームへ移行して地域で暮らして初めて支援というのは始まるんです。終わったんじゃない、始まるんですよ。

### 移行後安定するまでの期間のフォロー体制

いつでも駆けつけてくれる、という安心感がないとどうも不安だ。だとするとバックアップ施設もいいけれども、客観的に見てくれる圏域のセンターがあったらもっといい。

今までの指導訓練型、固定的な支援では間に合いません。地域生活から発生するニーズは、最も個人個人いろんなバリエーションが要求されるわけです。

今度、サービス管理責任者、グループホーム 30 人。個別支援計画を誰が作るのか、サービス管理責任者が作るのか。この間、国で指導者研修、地域生活の共同生活共同介護、生活訓練のところのお手伝いをさせていただきました。

その中で、大塚専門官が盛んに言っていたのが、グループホームのサービス管理責任者は個別支援計画を確認する側に回ってほしいということでした。じゃあ誰がこの支援計画を作るの？世話人さん？サービス管理責任者と世話人さんと本人と一緒につくればいいじゃない。でも個別支援計画は誰がチェックするの？市町村自立支援・地域自立支援協議会に持って行くの？いちいち個人レベルの支援計画を協議会でチェックしませんよね。ではどこで誰が客観的な評価をするのでしょうか。腑に落ちません。

でもサービス管理責任者という職種が出来たわけです。今までの何か作っておけばいいという個別支援計画じゃない。今度は明確に個別支援計画というのを位置づけるならば、この中に本人の暮らしを3ヵ月後、半年後と見直しながら、評価して本人がこれでいいですと、納得しながらという、この辺のチームワークを明確にしていけないといけないだろうと思います。

そうすると世話人さんに申し訳ありませんが、ひと踏ん張りふた踏ん張り、がんばっていただいて個別支援計画を作るところに、少し関与していただけるといいなと思います。地域で暮らしている人を一番よく知っているのは世話人さんですから。

### 足す支援から出し入れする支援へ。そして引く支援へ

よき支援者としては、引く足す支援をして下さい。引く足す支援というのは、利用

者さんが自ら育てていってもらって実は支援者も一緒に育っていくんです。

今まではいつも足す支援をしていたので、足さなきゃいけないと思うと疲れます。たまには見守る、何もしない支援とか、引いていく支援とかあっていいんじゃないですか、ということを書いたかったです。

よき支援者が陥りやすい落とし穴

これだけ言っておきたいんですが、こういう世界に行かないで下さいね。何とかしないと。誰もわかってくれないから私がんばるもん。でもがんばりきれなくて結局自分を責めてしまう無力な私、だから世話人を辞めるわ。

支援する側のストレスマネジメント

世話人さんがとても疲れる1人職場、共感する場面があって言葉で伝えても伝わらない、伝えようがない。施設だと複数の職員がいるから、こうだよねと言えるけど、グループホームだったら1人で感動して1人で納得して1人で怒りを収めなきゃいけない。

そういうふうになると、とってもストレスがたまると思う。世話人さんにはこういった役割として、このエリアでも横の連携をとられて、愚痴の言い合いというか、お互いの思いの言い合い伝え合いというのを、きっとされていると思うんですが、これからみなさんがスーパーヴィジョンが受けられるような場面・関係性を作っていくください。自分はこの応援方法でよかったかなあと振り返る場面を持つときに、「よかったよ」「悪かったよ」という言葉は要らないです。

「うんうん」って聞いてくれ、「それでいいんじゃないの」とか、「悩んだのね」とか共感してくれる人・場面があったら、どれほど助かることか。誰かに解決してもらうわけではありませんよね。自分で整理し解決していくわけですから、客観的な評価をそれとなく知る場面が必要なんです。

そういう関係性を使っていければ、きっと地域生活移行の現場で毎日のリアリティを感じながら応援していただける、とても貴重な人材を失わなくてすむのではないかというようなことを思いながらスライドを使ってお話をさせていただきました。

地域生活に移行しているんな状況があるよ、それを支える世話人さんがやっぱり元気であってほしいなという思いも込めて、こんなところまで突っ込んだスライドをつくってしまいました。長々とお清聴ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。お話を伺ってこういったことを聞いてみたいというご質問があれば、お受けしたいと思います。

岩本

私は身障者の夫を施設に預けている浜田市出身の妻で、浜田市には身体障害者療護



施設はなく現在松江市の民間施設身体障害者シリウス苑に入居させてもらって全ての生活を松江に拠点を移して生活をしておりますが、本日のお話の地域生活移行が本県でも取り組まれますならば、地域に生きたい当事者の夢が実現できる時代が来るのかと思えば嬉しく、本当にありがたく私は喜びます。

本日は山田先生本当にありがとうございました。

施設男性職員

入所施設の子どもの将来的な事を考える時に、施設に残るか地域に出るか、どうしても選別というような感じで考えてしまうようなところがあって、今後考え方としてどういうふうを考えていけばいいのかと。

山田

難しいですね。私は入所施設を否定しているわけではないんですが、自分が住めない所に住めとは言えないです。

かといって安心できる状況が地域にあるかということ、ないことが多いです。そういうことで、すみませんと言わざるを得ないですけども、ただ障害の重さ軽さで地域生活が獲得出来るか出来ないかというのは、自分の中ではやってはいけないと思っています。

確かに今回の障害程度区分で、区分4以上は施設入所をずっとしていいよと、昼間は生活介護でいいよとは全然思わないです。

実は軽度の人の方が、地域生活移行が難しいです。最重度の人の方が地域生活支援をやりやすいです。もうみなさん知っているでしょう、みんなどこかへ行ってしまいますからね。後始末ばかりで、支援のお金は来ないし、支援は増えるし、後始末ばかりしなきゃいけない。いい加減にしろと言いたくなるのが多いです。

そういう意味で言うと、障害の重さ軽さよりも支援の大変さで言うと、あまり関係ないと思っています。

どうやって入所施設から地域へというか、入所施設を利用している人たちが自分の思いを実現するには、どういう段取りを踏んだらいいのだろうか。

少なくとも職員がその気になってもらわないといけないし、安心できるような1つのモデルを1つ2つ作らないと、親御さんはきっと信用されないと思いますので、そのモデルは歯を食いしばってでもやると。

こういう暮らしと言っても、目の前に見えないとわからないんですよ。こういう暮らしはこうだということは、したらいいなというような感じです。

進路として私は20歳になったら、大人だと。年金をもらえると年金を積み立てて働き場所とプラスの短大みたいな、入所施設はこれからそんな機能がほしいと思うんですが、地域で暮らすための短期大学というか専門学校というような感じで、それが生活回復訓練だと思っているんですけども、そういった中で暮らしを組み立てていくのが入所施設がこれからやっていく事業かなと思っています。

うまくいかないで戻ってくる方がいるんです。再入所してきた人は今度3人いまし

た。最初に戻ってきた20代の女性は、体重が増えてドクターストップがかかったんです。今度はこういう仲間と地域で暮らしたいと具体的に言ってくれたので、また組み立てようと思っています。

そういう戻ってきてもいい、また自分の力を蓄えるエンパワメントするための期間として、入所施設が24時間を最大限機能する活動をしてやればいいと思います。

そんな役割をしながら、送り出していくということを、彼らが求める暮らしを支援するということで障害の重さ軽さ関係ないというところで、事例を1つ2つ作っていってもらおう。その中できっと自信を持ってやれますよ。

その代わりに、入所施設の今までの支援技術は邪魔になることがあるので、それを捨てて下さい。そして地域で暮らす仕組みをもういっぺん職員も学びながら、是非一緒にやっていただきたいと思います。お答えになっていないかもしれませんが。

司会

これで終わりたいと思います。山田さん、どうもありがとうございました。

山田

知事が代わられたのでどうなるかわかりませんが、たぶん大丈夫だと思いながら、がんばっていきたいと思います。西駒郷だけ長野だけという問題ではないと思いますので、どうぞ島根県でもいろいろな事例を作っていただいて、やっぱり地域生活という暮らしがいいんだ、支援の仕組みをこうしたら安心感が得られるのだという、うねりを確実にしていただきたいなと、こんなことを願っています。

どうぞみなさん、いい仕事をしていただけたらと思います。どうもありがとうございました。